

法華經を書写して父を救った遺龍

中国は漢の時代。高名な書家烏龍は絶対に仏教經典だけは頼まれても書写しませんでした。彼の臨終の遺言も徹底していました。「いいか息子遺龍よ。我が一門は天尊である老子さまを信仰する。私の死後も仏典を、なかでも法華經だけは絶対書くことならぬ。もし約束を破れば悪霊となって汝を殺す」というものでした。時が流れて、遺龍は国王の司馬氏から法華經を書写することを命じられました。遺龍は父の遺言を楯に断りましたが、王の命令は絶対です。彼は、法華經の各品の章題だけを書くことを承諾し、書き写しました。

親不幸をしたという気持ちで涙ながらに眠りについたその夜、不思議な夢を見ました。父親が光り輝く天人の姿で庭に現れたのです。そして、虚空には六十四の仏さまがおられました。「息子よ、私は法華經を謗った罪で無間地獄に堕ちてしまった。この苦しみは喩えようもないものだ。しかし、昨日の朝、その地獄に突然、妙の字が飛来して金色の釈迦仏となったのだ。その釈迦仏はこう仰った『たとえ天地に満ちるほどの大悪を犯した衆生であるといえども、ひとたび法華經を聞けばすべて成仏する』。その文字の中から大雨が降り出し、地獄の火炎をことごとく消してしまった。次に法の字、蓮の字、華の字と飛来し、ついに六十四の文字がすべて仏の姿になって無間地獄を照らし、私たちは地獄より救われたのだ。私は、その六十四の仏さまはどこから来られたのか尋ねてみた。すると、その仏さま方は、おまえが国王の命令で書いた法華經八巻の章題の文字だったのだ。遺龍よ、おまえの写經の功德が私を救ってくれたのだ。ありがとう、我が息子よ」不思議な夢から覚めた遺龍は、今後、仏教經典以外の文字は絶対に書くまいと決意するのでした。

中国の『法華伝』にある有名な物語です。「法華經の六万九千三百八十四文字の一つひとつが、真の仏である」というように法華經を書写することには、これほどの功德があるのです。